



Historical / Natural heritage in Amagi town



意外？ クツカルは渡り鳥 島の鳥 今昔

島でもお馴染みの、キョロロロロ〜と鳴く**アカショウビン**は夏鳥ですが…案外、いつでも島にいる鳥と思いませんか？。4月下旬に来て、夏に子育てし、9月中旬には東南アジアへ帰ります。奄美や沖縄に渡ってくるのは、亜種リュウキュウアカショウビンです。幕末に書かれた「南島雑話」(名越左源太 著)には「ミヤマヒスイ、四月中多来、鳴声ハ鶯如、好テ蝸牛食」とあります。独特の声を、とんびのピーヒョロロロに例え、よくカタツムリを食べるのを見かけていたようです。今回は、江戸時代〜明治時代の記録から、鳥の分布や方言名などについて探ってみましょう。

カタツムリなど獲物を枝に叩きつけ弱らせてから丸呑みする



意外に多い？ アカショウビンの方言名

火の鳥の異名をもち、姿も声も印象的なので、各地に名が残っています。

亜種リュウキュウアカショウビンでは…徳之島、クツカル/コツカル/コカール。奄美大島、クツカル/クツカルー/クツクルー/コオロ。沖縄本島、クカル。渡嘉敷・名護、コツカラー/コツコレー。宮古島、クカイ。八重山、コツカルー/コツカラー/コツカールー/コツカールー/コツカル/ホツカルなど。

亜種アカショウビンでは…アイヌ語、ウケケチリ/ウウケケチリ(語尾の「リ」は独特の小さな発音)。秋田県、あまふねどり。中越地方、ケロロ/キョロロ/テロロ/テル/さずいどり/あまこいどり/なんぼんどり/みずあげどり。茨城県、あまこいどり/じごくのかねつき/しょーびんどり/ひごま/まめころばし/みずこいどり。埼玉県、みづほしどり/あめふらし/フレフレ。山梨県、みずこひどり。静岡県、みづこい。岐阜県、あまこひどり。和歌山県、みづこい/ミズヒョウロ(昔話)。高知県、みづこい、などなど。おおむね、南国では声の聞きなし、アイヌでは神の鳥、米作の盛んな地域では梅雨や雨乞いに関わる名で呼ばれていました。また、江戸時代の図には、みやましようびん/みやまそび/やまそな/みやまひすい/あかひすい、などと書かれています。

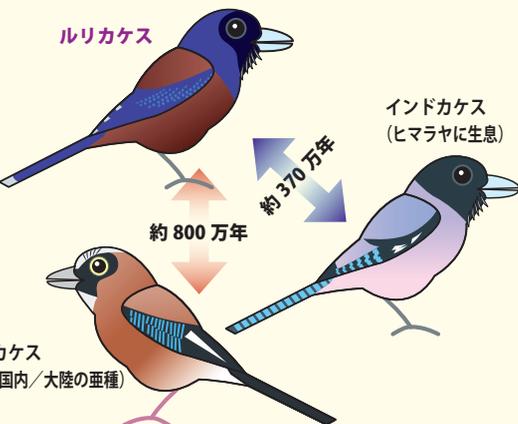
なぜ体が赤いのにアカヒゲ？

幕末に奄美大島の事柄を書いた「南島雑話」に「野駒、昔この無名の鳥に、のどが赤いので、アカヒゲと名付けた」(現代訳)とあり、ノゴマをアカヒゲと名付けた事を知っていたようです。また、江戸の昔から鳥愛好者にとって、アカヒゲの名が不自然だと思われていました。当時の著名な鳥の飼育解説書「飼籠鳥(かいこどり)」には「薩州の官吏が、あかひけ(赤い毛)の鳥と書いて琉球へ問い合わせたところ、琉球はひげの字をひげと読み違い、赤鬚鳥としたため返した。以来、薩州は琉球の赤鬚鳥として、誤って世に伝えた」(現代訳)とあります。かなを漢字にした顛末は不自然ですが、いずれにしろアカヒゲの由来は、当時から怪しまれていたのです。事情はどうであれ、赤い小鳥は琉球産の愛玩鳥**アカヒゲ**として、時とともにその名が広まってきました。

現在の奄美ではハーヒギヤアカヒギヤ、沖縄ではアコウなどと呼ばれており、薩州の官吏は外国の琉球でなく、藩内の奄美大島に問い合わせた可能性があります。

これらを総合すると…サトウキビ畑で少なからず越冬しているノゴマは、当初喉が赤いので**アカヒゲ**と呼ばれており、薩州の官吏からの質問に奄美大島からは、とりあえず喉に赤い毛を持ったノゴマの**島口名=アカヒゲ/赤鬚鳥**と回答。当時は、砂糖地獄と呼ばれる厳しい生活だったので、シマンチュには森の小鳥に興味を持つ余裕がなく、無名だったでしょう。その後、奄美へ鳥を捕獲してきた本土の人たちが「アカヒゲという小鳥を知らないか？」とたずねたりしたために、逆輸入的に広まったのでは？？？

あくまでも仮説ですが！



手違い？



今の和名 アカヒゲ

本当のアカヒゲは誰？

江戸時代後期、医師/博物学者シーボルトがオランダのデミングに送った標本の名が、コマドリと入違う手違いが発生！学名がアカヒゲ=Erithacus komadori、コマドリ=Erithacus akahigeとなりました(現在、属名はErithacusからLarvivalaに変更)

ちなみに、沖縄本島北部に生息しているのは亜種**ホントウアカヒゲ**です。



新たに青ひげ登場

元祖？



今の和名 ノゴマ

島のサトウキビ畑で相当数が越冬していますが、とても臆病です

ルリカケスは徳之島にはいないの？

現在はいません。鳥類学者の間では、生息していた可能性は高いとされていますし、なんと1920年(大正9年)に島内で発見例があるそうです。住木野(三京)の獵師さんが、戦前まで見ていたとの証言もあります。明治時代の「徳之島事情」(徳之島町出身、吉満義志信 著)には、「飛禽トハ、鷹、鴨、鳩、鳥、千鳥、花吸、鶯、鶉、**山鳥**、赤鬚、鶯…」とあり、**山鳥**に注目。幕末の「南島雑話」には「**紺瑤禽ヤマガラス**、一名**ヒヨシヤ**」とあり、ルリカケスは奄美大島の島口でヒョウシヤなどと呼ぶことから、**山鳥はルリカケスの可能性**があります。江戸時代中期には、ルリカケスは「紺瑤禽(こんようきん)」「豹射(ひょうしゃ)」「やまがらす」「りうきうかけす」などと呼ばれ、舶来の鳥として珍重されていたようです。時代は遷り、明治時代に鮮やかな羽を目当てに乱獲され、激減しました。明治末期に捕獲禁止になったものの、戦時中も減り続け、ついに絶滅してしまったのかもしれない。骨が見つければ、生存が証明されるのですが…

ちなみに、近縁種は九州以北や東アジアに分布するカケスではなく、遠く離れたヒマラヤのインドカケス。カケスとは約800万年前に、インドカケスとは370万くらい前に種が分かれました。

もっと情報が見られる電子版はこちら

